

妥当性・信頼性・実際性のある評価(1)

— 技能別評価専用場面の設定 —

筑波大学附属中学校教諭

肥沼 則明

1. 評価計画作成上の問題点

新教育課程の施行に伴う新たな評価(絶対評価)のあり方を巡って、中学校現場は大変混乱している。各学校や自治体では何度も研修会が開かれ、何をどのように評価し、それをどのように生徒や保護者に伝えるのかという検討を行ってきた。

ところが、何を基に評価計画を作っているのか誰もわからない。そこで、教科書会社で作った指導書の指導計画に示された評価規準を参考にすることになる。そして、各課(単元)に示された目標に照らし合わせて、もっともらしい評価項目が生まれてくる。

しかし、このような評価計画を立てようとした時点で、実際的な評価活動を行うことはできなくなると考えたほうがよい。その理由は、指導書に示されている各目標がどの程度達成されているかをこと細かに評価することは、あまりにも教育現場の実情からかけ離れているからである。例えば NEW HORIZON Book 3, Unit 1では、到達目標が9項目示されているが、それぞれについて各生徒の目標達成度を評価し、さらにすべての課において同様のことを行うなど現実的ではない。

2. 評価専用場面の設定

では、妥当性・信頼性・実際性のある評価を行うためには、どのような視点で評価計画を作成したらよいであろうか。この点につい

て、筆者は次の3点が重要だと考えている。

- ・単元よりも中・長期的なもの
- ・教科書から離れて技能に特化したもの
- ・指導とは切り離れた評価専用のもの

その理由は以下のとおりである。

(1) 観点別評価導入時の反省から

前回の学習指導要領改訂時には、観点別評価の導入に際して不必要にチェックマンと化した教師が問題となった。これは、生徒の発言や行動に対して逐一補助簿に記録することばかりに気をとられ、本来ならば指導をするべきところでそれを逃してしまっていた現象を指している。したがって、指導すべきところでは指導に集中し、その成果をパフォーマンスさせる場面で評価活動を行えば、このようなことは避けられる。

(2) 言語習得に関する議論から

目標表現が身についているかどうかの評価を単元ごとに行っても、本当にそれを理解できているのか、また表現できるほど身につけているのかを判断するのは難しい。例えば、ある時間で教えた表現をその時間の最後に言えたとしても、そのような短期記憶的タスクにおける結果だけで、その表現が身についているかどうかを判断するのは妥当性のある評価とは言い難い。言語が本当に身についているかどうかは、教えてからある程度時間がたち、総合的に運用させてみて初めてわかるものであるはずである。

(3) データの信頼性の面から

観点別評価が導入された時に、(1)で議論したことはすでに問題視されていた。しかし、それに対する行政側の回答は、「数時間で結果的に全員を評価できればよい」というものであった。しかし、これにはデータの信頼性という面で問題がある。すなわち、授業が変われば当然与えられるタスクは違うわけであり、また評価する側の教師の判断基準にも大きな揺れが出やすくなるからである。そのようにして蓄積されたデータは、最終的な評価をつける際にはまったく使い物にならない。

したがって、全員を、できるかぎり同じ条件下で、一斉に評価できる場面を設定することが重要となってくるのである。

(4) データの収集・処理の面から

単位時間の授業や單元ごとの評価には、多種多様な評価項目が存在する。これをすべて行うことの無益さは『で述べたとおりであるが、仮に評価項目をしぼったとしても、評価観点の多さはそう変わらない。したがって、そのようにして地道に貯められた多種多様で膨大なデータは、結果的に処理しきれなくなることが予想される。

これに対して、評価項目を限定できる評価専用場面で得られたデータは、最終的な処理もしやすい。特に、技能ごとに限定した評価場面では、評価観点の共通性が高く、個々のデータの単純累積がしやすい。

③ 技能別評価専用場面の実例

4技能のうち、授業において評価専用場面を比較的設定しやすいのは「聞くこと」と「書くこと」である。これは、前者はリスニング・テストで、後者は作品などで評価できるからである。また、「読むこと」の中の“読み取り”も比較的評価しやすいといえる。

そこで、ここでは日頃の授業ではなかなか設定しづらいとされている「話すこと」と、「読むこと」のうちの音読における評価専用場面について、本校で全学年共通で実施して

いることを紹介する。

(1) 定期面接テスト(話すこと)

①実施時期

本校は二期制(前期・後期)を採っており、各期の期末考査の前後に行っている(事情によって学年末だけのこともある)。

②実施形態・内容

基本的には次の2つの型があり、ALTの配置時期(3年は前期、1・2年は後期)によって使い分けている。詳細は資料1の生徒向け実施要領を参照いただきたい。

◇TT型 — 生徒は、ALTに対して予め準備してきたトピックについての短いスピーチ(30秒~1分)を行い、その後ALTの質問に答える。JTEはその様子を観察し、評価をつける。

◇ソロ型 — 活動内容は対ALT型と同様であるが、運営全般の他、スピーチの聴取、質問、評価のすべてをJTE1人で行う。

③実施方法

いずれの型でも2時間をかけることを基本としているが、TT型では1時間で行ったこともある。実施場所は廊下または隣の教室とし、残りの生徒には自習課題を与えておく。

④評価の観点

詳細な観点は各試験によって変わることがあるが、大きなカテゴリーとしては、スピーチの内容と英語の使い方、質問への応答の仕方等が設定されることがほとんどである。

なお、結果的に予めスピーチを準備させることから「書くこと」も含まれることが考えられるが、原稿チェックをしないことでそれを排除することとしている。

⑤留意点

クラスの全生徒に対する個別試験を限られた時間で完了するには、時間のマネジメントが必要不可欠となる。そこで、生徒の入れ替えに伴う無駄な時間を極力排除するために、試験時間は「持ち時間制」とし、すべてをその時間内に終了するようにする。また、

持ち時間は、予め MD に編集しておいた合図をリピート機能を使って示すようにすればよい。

(2) 定期音読テスト(読むこと)

①実施時期

年間3回の長期休業直後の時間に行う。本校では全学年で長期休業中に「英語上達日記」と題した自主学習を行わせているが、その学習成果を披露させる時間でもある。

②実施形態・内容

長期休業前の期間に勉強した範囲の教科書本文を制限時間内読み続ける。また、聴取を奨励しているNHKラジオ「基礎英語」のテキストにチャレンジすることも可としている。

③実施方法

公開発表方式とし、一人ひとりが教卓のところでクラスメートを前にして発表をする。これは、この活動がもともと音読“コンテスト”を通して仲間同士で学び合おうというものであったからである。なお、詳細は資料2の生徒向け実施要領を参照されたい。

④評価の観点

生徒には指導として「声量」「発音」「リズム」「感情」などの観点を与えることがある(資料3)が、教師側の評価は観点別につけることはなく、総合点だけでつけている。これは、過去の実践から、必ずしも観点ごとの評価の合計点が全体の印象とは一致しないことがわかっているからである。

また、この活動が単なる評価のためのものではなく、指導も兼ねた形成的評価にもするために、教師の感じたことをアドバイス・シートの形でフィードバックしている(資料4)。

⑤留意点

本活動の主な目的の1つは、入学以来、音読の力がどれだけ伸びたかを自分で確認することである。したがって、個人の記録を累積するために、個々の発表を各自のテープに録音させるようにしている。これは同時に、録音されるといふ心理的負荷から発表の質を上げるという効果にもなっている。

なお、時間のマネジメントについては(1)で示した方法と同様に行うとよい。

(3) その他

「話すこと」や「読むこと」に限定した評価専用場面として全学年共通で実施しているのは以上の2つであるが、この他に以下のような「書くこと」と「話すこと」の関連を考えて実施している評価専用場面がある。

◇スキット・コンテスト(3学年共通)

◇Show and Tell(2年生)

◇ディスカッション論題提示(3年生)

なお、これらの実践はホームページ上でも紹介しているので、併せて参照されたい。

<http://village.infoweb.ne.jp/~koinuma>

④ 評価規準をめぐる問題

今回紹介した2つの評価専用場面で得られた評価点は、観点別評価の「表現の能力」をつける基礎データとして利用できるものでもある。しかし、これまで目標達成度に照らし合わせた評価規準を明確にしてこなかったため、絶対評価による評定材料として利用するために、英語科内で激しい議論を繰り返している。

一番難しいのは、観察法によるテストでは、個々の教師によって評価対象の印象が違うことである。例えば、音読テストで、どの程度に読めれば何点を与えるのかということの共通理解を図ったとしても、結局は最終的な判断は個人によって違う可能性が高い。

ただし、このような事態を打開する手だてがないわけではない。それはサンプルを使って関係者全員で評価をし、結果を突き合わせて議論をすることである。本校英語科でもこれまでに何度かこれを実施してきた。もちろん、これによって評価者間のギャップが無くなったわけではないが、少なくとも以前よりは小さくなった。また、議論をすることで、それまでやや独りよがりをつけていた評価を、より幅広い視点で行えるようになったことは、各自にとって大きな収穫である。

資料1 「面接テスト」生徒向け実施要領 (左:TT型, 右:ソロ型)

2年生 Show and Tell

前期末オラル・コミュニケーション・テスト実施要項

- 目的**
 - 本授業や普通授業の中で鍛えたオラル・コミュニケーション能力(「聞くこと」「話すこと」のコミュニケーション能力)を測る。
 - 時間をかけて準備したものでなく、即興的な「話すこと」の英語力を測る。
- 期日** 9月24日(金)、10月8日(金)のShow and Tellの時間
- 内容**
 - 与えられたテーマについて1分間 Monica に話す。
 - 自分の話した内容についての Monica の質問に答える。
- 方法**
 - テーマを選択する
 - 次の3つのテーマの中から、その場で1つをくじ引き方式で選択する。
 - My Family My Hobby My Dream My Best Memory
 - テーマに関して1分間自由に Monica に話す
 - テーマ選択と同時に針時計を開始する(話すことを考える時間も含む)。
 - 一方的に話すだけでなく、必要があれば問答をしながら話してもよい。
 - 自分が話した内容について Monica の質問に答える(1分間)
 - 質問に対して最低限の情報を与えるだけでなく、できるだけ多く話すようにする。
- 備考**
 - 評価の観点(各項目5点、計15点)
 - ①内容……質、量ともに十分に話しているか
 - ②英語……正しい英語を使っているか
 - ③態度……積極的にコミュニケーションを図ろうとしているか
 - 評価の扱い
 - 後期 Show and Tell の評価点の一部とし、後期英語の評価資料に入れる。
 - 実施の順番
 - 2時間に分けて行われ、順番についてはクラス毎(担当者毎)に異なる。
 - 試験場所は廊下または隣の教室を予定しているため、次の2人くらいは試験場所待てよう。
 - 持ち時間の学習
 - Show and Tell の原簿を作成してみて、どんな点に困難を感じたかを別紙のレポート用紙に記録する(「Show and Tellレポート」を参照のこと)。
 - 英語係の仕事
 - 直前の休み時間に開場設定をしてもらいます。前日までに各担当者と打ち合わせをしてください。

学年末コミュニケーション・テスト

第1学年英語科 久保野 配沼

英語の学習を始めてから早くも1年が過ぎようとしています。これまでの学習でみなさんはかなりの力を身につけてきました。その力のうち、「聞くこと」「読むこと」「書くこと」は定期考査や小テストなどの一定の条件下で測ることができ、みなさん自身も結果を具体的な数字の形で目にすることができました。しかし、「話すこと」については、日頃の活動や発表などの「観察」とおして大まかに知ることはできても、実際にどのくらいの力が付いているのかを測ること、また自分でそれを自覚することは難しいというのが現状です。

そこで、下記のような要領で学年末考査に併せて「コミュニケーション・テスト」を行い、この1年間で身につけた「話すこと」の力を測りたいと思います。

- 実施日** 月 日()・ 日()
- 場所** 放送室(または)
- 方法** 1人約2分間の個人面接方式による
- 内容**
 - Show and Tell部門(1分以内)
 - 家族、友人、あこがれの人などから1人を選び、その人のことを1分以内で説明する。
 - ※自分がよく知っていて、その人に関する質問にも答えられるような人を選ぶこと。
 - ※話す際には、写真やイラスト、関連の物など、必ず何か見せる物を用意し、それを利用して話す。
 - Questions and Answers部門(約1分)
 - 上記で話した内容について、先生の質問に答える。
 - ※単に必要な情報のみを答えるだけでなく、できるだけ多くのことを話すように努力する。
- 評価**
 - 次の点について評価する。
 - (1) SAT部門……語法、発音とリズム、見せる物の使い方、伝えようとする意欲
 - (2) Q&A部門……質問への適切な応答、できるだけ多く答える力
- 備考**
 - テストを持っていく間と終了後の時間は、学年末考査の勉強をする。
 - テスト中の合図は、後個人分析に利用するので、カセット・テープを1人1本用意してください。(忘れても貸し出しはしないので注意する。)
 - テスト結果は、考査終了後にフィード・バックする。
 - 試験の順番は とする。

資料2 「音読テスト」生徒向け実施要領

Reading Show 実施要項

—夏休みの学習の成果を発表し、仲間から学ぼう—

- 実施日** 次回の英語の授業 → / () [] 時間目
- 内容** 教室の場所で、テキストの定められた箇所を一人30秒間読む。
- 発表順** 担当者の指示したとおり()
- 読む場所** 教科書が基礎英語のどちらかを選択し、ページは直前にくじ引きで決める。

コース	(1) 教科書コース				(2) 基礎英語コース			
	1	2	3	4	5	6	7	8
読む所	Unit 1	Unit 2	Unit 3	Unit 4	5月号	6月号	7月号	8月号

※読み始める場所は、教科書のコースは各Unitの最初のページとする。
基礎英語コースはその月の範囲ならどこでもよいものとする。

- 発表手順**
 - 待機場所に移動し、コースを選択した上で、くじを引く。
 - テープレコーダーにカセットテープを入れ、自分の順番が来るまで待機する。
 - 自分の番が終わったら、早く発表場所に移動し、該当箇所を聞いて準備を完了する。
 - 合図があったらテープレコーダーのスイッチを押し、発表を始める。
 - 最初、①出席番号 ②名前 ③Unit名/Lesson名 を言って読み始める。
 - 30秒の合図がなると先ページまで読み続ける。合図があったら途中で読む。
 - ※発表ページまで戻ってしまった場合は、最初のUnit/Lessonに戻って読む。
 - 読み終わったら、カセットテープを取り出し、テープレコーダーを元の位置に戻す。
- 取組方法**
 - テキストを開かず仲間の発表を聞く。
 - 発表記録用紙の観点毎に一人一人の発表を評価して点数を記録する。
 - 全員が発表を終えたところで、優秀者の候補を投票する。
- 注意事項**
 - ショーが始まったら静粛にし、個人の練習は行わない。
 - ロス・タイムをなくすために、少なくとも3人は待機位置についているようにする。
 - 評価の高い人と高くない人の理由を分析し、自分の読みに活かすためのヒントをつかむようにする。
- 準備**
 - カセットテープ(使用済みの物/専用の新しい物)を持っていくこと。方が一忘れの場合は英語科のテープに録音しておくが、翌日にテープを持参して英語科準備室前のテープレコーダーを使ってダビングしておく。記録がない、後で自己評価ができない。
 - 自分が選択したコースならどこがあってもよいように最終的な確認をしておく。その際には、評価の観点(声量、発音・リズム、感情表現)に留意する。

資料3 「音読テスト」生徒相互評価用紙

Reading Show 評価記録表

- 評価の観点**
 - 声量……必要十分な声量があり、全員に聞こえようとしているか。
 - 発音・リズム……単語の発音、文のイントネーション・リズムが英語らしくか。
 - 感情表現……場面に合った適切な感情表現をしているか。
- 評価の基準**

以上の評価の観点のそれぞれについて、次のように4段階で仲間の意見を評価してください。

 - ……評価項目をかなり高いレベルで満たしており、「すごい!」と言える。
 - ……評価項目を満たしており、「上手だ」と言える。
 - ……評価項目に少し不足があり、「やや不十分」と言える。
 - ……評価項目をまったく満たしておらず、「ダメだ」と言える。
- 評価数**

No	名前	声量	発音	感情	計	No					
						名前	声量	発音	感情	計	
1											21
2											22
3											23

資料4 「音読テスト」評価フィードバック

Reading Show 評価フィードバック

自分の課題を確認しよう

日付 月 日() _____ 組() _____

- 今日の発表で良かった点は
 - Read and look-up で顔を上げて見える 自分の言葉として言える
 - 読み込んで内容が頭に入っている 場面に応じて表情豊かに言える
 - 大きな声で堂々と言える 間違えずに、きちんと言える
 - 区切れる リズム 発音()
 - 上達への工夫が感じられる
- これらに気をつけて練習してほしい点は
 - Read and look-up で顔を上げて見える 自分の言葉として言える
 - 読み込んで内容が頭に入っている 場面に応じて表情豊かに言える
 - 大きな声で堂々と言える 間違えずに、きちんと言える
 - 区切れる リズム 発音()
 - 上達への工夫が感じられる